

# ウィリアム・フォークナーの「勝利」 ——その裏側の真実

梅 垣 昌 子

10代の頃から詩作に励んでいたウィリアム・フォークナーは、イギリスのロマン派やフランスの象徴主義の詩に影響を受けつつ、詩人としての成功を夢みていた。優に100編を越える詩作品を公表し、早い時期に詩集の刊行を行なっているものの、その道では大成せず挫折を味わうことになる。その後、20代半ば過ぎにヨーロッパ訪問から帰国したフォークナーは、次々と小説を発表し、特に1929年出版の『響きと怒り』において、モダニストとしての鮮烈な印象を世に与えたのであった。<sup>1</sup> この作品の背景には、アメリカ南部の旧家の没落があり、その主要な登場人物はフォークナーの他の作品にも再び現れて、ヨクナパトーフア郡という架空の物語世界が形成されてゆく。円熟期を迎える30年代以降に発表される『アブサロム、アブサロム！』や『行け、モーセ』などの数々の作品においても、南北戦争や人種問題の影が色濃く落ちており、それらはフォークナー文学の重要な要素となっている。

このように、フォークナーの作品風土と南北戦争とは切り離せない関係にあるのだが、フォークナーは第一次世界大戦をテーマとした作品も残している。その中でもおそらく初期に執筆されたと思われる短編小説“Victory”は、様々な点で興味深い。この作品を注意深く分析すると、それがフォークナーの物語世界の本流に繋がる重要な位置を占めるものであることが明らかになる。しかしながら、この作品はこれまで、綿密な評価をされてこなかった。その理由は幾つか考えられるが、その主なものは、短

編集に組み込まれた際の扱いや、主人公の描出方法の吟味の仕方などに起因すると思われる。別のいい方をすれば、“Victory”という短編作品の位置づけや、その内部構造を詳細に検討することによって、この作品の重要性に新たな光を当てることができるのである。

本論では、“Victory”を、ヨクナパトーファの世界へと繋がるフォークナー文学の出発点の一つと考え、その作品構造や語りの視点の移動、および繰り返し現れるモチーフなどに注目して綿密に読み込むことにより、この短編のもつ真の意味を探っていく。その際、“Victory”が収められている短編集の中で、同じく第一次世界大戦を扱っている他の作品との比較も視野に入れながら、“Victory”を立体的な座標軸の中に位置づけ、その独自性を浮き彫りにしていく。

## I

“Victory”の内容を詳細に見てゆくのには先立ち、この作品の成立事情と出版過程を明らかにすると同時に、フォークナーの作品群における短編の重要性について触れておかなければならない。以下、フォークナーにとって短編小説とはどのような表現手段であったのか、また、その集積である短編集はどのような意味をもつものであったのかについて、概略を述べる。続いて、“Victory”の成立事情と、それが短編集に組み込まれた経緯を確認し、この作品が短編集の中でどのような位置づけを与えられているのかを、フォークナーの残した記録や言葉などに基づいて検討する。さらに、“Victory”が批評家の間でどのように扱われているかを概観する。

フォークナーにとって、短編と長編は、それぞれ独立した表現形態というよりも、相互補完的であり、かつ一方が他方への移行する可能性を含んだ、動的な関係を有していた。短編と長編の創作活動は、初期より平行して行なわれ、時には短編を改訂して長編に組み込んだり、或は短編を有機的に組み合わせて長編に仕上げたりするという作業が行なわれた。従って

フォークナーが短編集の出版に際し、そこに収める作品の選択や配列にこだわりを見せたことは、十分に納得ができる。Dian Brown Jones が、フォークナーの言葉を引用しつつ短編の解説書の前書きに記しているとおり、彼は短編集に“...an integrated form of its own”をもたせようとし、それ自体が一つの作品として“single, set for one pitch, contrapuntal in integration toward one end, one female.”であることを目指していたのである。<sup>2</sup>

フォークナーは、このような方針に従って編纂された *The Collected Stories of William Faulkner* を、1950年の8月に出版した。同年の11月に、その“powerful and independent artistic contribution in America’s new literature of the novel”によってノーベル文学賞を授与されたフォークナーは、Modern Library 版の著書の売り上げが10万部を超え、ペーパーバックの発行部数も250万冊に達する勢いとなるなど、ようやく作家としての商業的成功を確立するに至った。<sup>3</sup> この短編集の構成を決めるにあたって、フォークナーは熟考の末、6つのセクションを配することにし、それぞれに“The Country” “The Village” “The Wilderness” “The Wasteland” “The Middle Ground” “Beyond” というタイトルを冠した。各セクションには4編から11編の作品が収められ、全体として壮大な物語世界を形成する仕組みになっている。本論で取りあげる“Victory”は、4番目の“The Wasteland”に組み込まれている。このセクションに含まれているのは、第一次世界大戦という時代背景を共通項とする5作品である。

“Victory”という作品が執筆された正確な時期は、定かではない。驚くべき数の短編を次々に創作していた1930年代前後、フォークナーはそれらを出版社に送付した記録を残している。その送付表に記された日付により、多くの短編の執筆時期や、出版社に受け入れられた年月日が明らかになっているが、“The Wasteland”に属する5作品の中で“Victory”と“Crevasse”だけは、記録が残っていない。<sup>4</sup> 同セクションに属する短編のうち“Turnabout”を除く4作は、1931年9月に出版された最初の短編集 *These Thirteen* の第一部に収められているので、それ以前に執筆されたものであ

ることは間違いない。しかし、正確な執筆時期については、関係資料に基づいて推測するほかはない。Hans H. Skei は、Joseph Blotner や James B. Meriwether らの研究を参考にしつつ、現存するフォークナーの未完の手書き原稿やタイプ原稿に基づいて、次のように推定している。“Victory”の前身は、*These Thirteen* が出版されるよりずっと以前の早い時期に執筆されたと考えられる。おそらくフォークナーがヨーロッパを訪れた1925年以降、すなわち1926年か1927年頃のものであろう。“Victory”の一場面と、1926年にフォークナーがイギリスから故郷へ書き送った手紙の中の記述との間に類似点が認められることが、その一つの裏付けとなる。その後、おそらく1931年の春に、フォークナーは、“Victory”の前身であった原稿から一部を分離し、“Crevasse”という作品として独立させた。こうして、元の原稿は“Victory”という作品となり、新たに生まれた“Crevasse”とともに同年秋に *These Thirteen* に収められ、約20年後に *The Collected Stories of William Faulkner* に再録されたのである。<sup>5</sup> 以上のような過程を経て、“Victory”は“The Wasteland”の中核を占める作品になったと考えられる。

このようにして出版への道を辿った“Victory”は、推定される執筆時期からみて、フォークナー文学の源流となる要素をもった可能性のある作品であるが、その構成と創作手法においても、注目すべき内容を含んでいる。そうでありながら、この作品はこれまで十分にとりあげられてこなかった。<sup>6</sup> この作品に、それが受けてきた扱い以上の重要性を認めている Skei でさえ、最初はそれ程高く評価していなかった旨を明らかにしている。<sup>7</sup> “Victory”に対する注目度が、他の傑作短編に比して高くはなかった原因を探るにあたり、Skei が指摘している2種類の“...critical attention given to Faulkner’s war stories”が良い参考になる。Skei によれば、第一に、「戦争もの」に分類される作品群を一括して捉えるという傾向が見られるが、この方法では個々の作品の複雑な意図が取りこぼされてしまう。一様に“endurance” “duty” “pride”といった抽象的なキーワードを用いて解釈が行なわれることになり、一般的な見解しか得られない。第二の傾向として、

戦争をテーマにした作品を個々に扱う試みも見られるが、この場合には逆に、作品と第一次世界大戦との関係が見失われてしまうことが多い。<sup>8</sup> “Victory” に即して言えば、“Wasteland” に含まれる他の作品と一緒に論じられたり、第一次世界大戦という時代背景が軽視されたりすることによって、作品の持つ固有の意味が掬いあげられず、その真価が理解されないという結果が生まれてしまうのである。

本論では、“Wasteland” を構成する “Victory” に注意を集中し、作品における時間や場所、および登場人物などの設定を強く意識しながら、そこに現れる具体的な出来事や挿話に基づいて作品分析を試みる。そうすることによって “Victory” の特色を浮き彫りにし、その延長線上において、フォークナーの文学世界における本作品の位置づけを探る。

## II

“Victory” は、スコットランドのクライドサイドに代々200年間続く船大工の家の長男をめぐる物語である。グレイ家のアレックは、父親のマシューや祖父の老アレックをはじめ、母親のアニーや3人のきょうだいと共に暮らしている。叔父のサイモンは女王からビクトリア十時勲章を受けた英雄で、宝石箱に入れられた深紅のリボンのブロンズメダルは、一家の暖炉の戸棚に収められた木箱の中に大事に保管されている。アレックが第一次世界大戦への出征を決心するにあたり、家業に誇りを持つ父親は、「船大工のグレイ家にはイギリスの戦争なんて関係ない」<sup>9</sup>と反対し、息子が跡継ぎになることへの希望を前面に押し出す。一方、68才で引退を間近にした祖父は、戦争の早期終結を予想し、サイモンの功績を引き合いに出して、「女王のためにご奉公するのを厭う者はグレイ家にはいない」ことを理由に、アレックの出征を後押しする。

兵卒となったアレックは、毎月故郷と手紙のやりとりをするが、まもなくアレックからの手紙が7ヶ月間途絶える。実はこの期間、彼は懲罰隊に

送られていた。ある雨の日に閲兵を受けた際、髭を剃ることを頑なに拒んだため、処罰されたのである。復帰後に戦場に出たアレックは、自分を懲罰隊に送った上官を銃剣で刺し殺す。上官を欠いた戦闘において、結果的に活躍をおさめたアレックは、その勲功を表彰される。この間故郷では新しい妹が生まれるが、祖父は亡くなり、その旨を知らせる手紙が届く。負傷から回復したアレックは、父親の心配をよそに将校を目指す道を選び、大尉に昇格する。上官として指揮をとったフランスの戦場で手柄をあげ、2度目の殊勲賞を故郷に送ったアレックだが、毒ガスにやられて入院を余儀なくされる。戦場へ戻ることを望みつつも、アレックはベッドの上で終戦の日を迎える。

医者から退院を許可されたアレックは、帰国後故郷に戻るが、父親の期待に沿って船大工を継ぐことはせず、「陸軍大尉 A. グレイ、戦功十時勲章・特別殊勲賞受賞」という名刺を携えてロンドンに向かう。友人のつてにより、そこで職を得ていたのである。アレックは、3年間勤務した後に休暇を取り、その為に準備した貯金をはたいて、激戦を経験したフランスへの旅に出る。ロンドンに戻ってみると、時勢の厳しさを理由に職場を解雇され、またたく間に彼の人生は転落の一途を辿る。臨時雇いや物乞いで糊口をしのぐアレックだが、戦後帰郷した時の身なりだけは頑なに守り続ける。焚火で熱した石をアイロン代わりにして一張羅の上着を整え、石鹸で口髭を固め、将校または英国紳士のシンボルたるステッキを手放さない。そんなアレックに偶然再会した戦友は、その落ちぶれように眼を疑い、吐き気を催す<sup>10</sup>。

以上が、“Victory”の中で起こる事柄を、時系列に沿って整理した内容である。後述するように、実際には上記の流れに沿って物語が進むのではなく、その時間は語り手によって再構成されている。また、上記ではアレックという名前で主人公に言及しているが、実際には語り手は別の方法で彼に言及している。これら作品の内部構造に関する説明に入る前に、作品解釈の際の問題の所在について明らかにしておきたい。

Skei は、作品のタイトルである“Victory”が、内容と照らしてアイロニカルな意味を帯びている点を取り上げている。戦争に勝利しても社会に根を張る階級制度は突き崩されず、従って、一兵卒に過ぎない主人公のアレック・グレイが士官として出世したとしても、戦後の人生を成功者として送れるわけではないからである。Skei はまた、語り手の視点に注意を払いつつ、作品前半のプロットを細かく追いかけている。これらは作品を理解するうえで大変興味深い記述である。Skei は更に、作品の解釈にあたって最も重要なのは、復員したアレックが故郷に戻れない理由や、彼が都会で落ちぶれてしまった理由が、作品内においてどう提示されているかを読み取ることである点を明確にしている。これは実に正鵠を射た指摘である。ただ、その理由として Skei が出している見解については、検討の余地が残されているように思われる。

Skei の見解は、以下のごとくである。Skei は、戦争から戻った主人公アレック・グレイが、外見が物を言う都会の生活に絡めとられ、自らのプライドを捨てきれなかったために、誤った進路の軌道修正ができなかったのだと述べている。<sup>11</sup> またアレックは、故郷の家族のもつ伝統的な価値観にとってかわる、新しく空しい生き方を選んだために、自分を見失うことになったという考えを示している。更に、社会的階級の高い者でなくとも、戦時中の下剋上ゆえに戦後の挫折感を徹底的に味わうことがあるのだとしたうえで、ごく普通の人々の価値観への信頼を表し、アレックが落ちぶれた原因は、この価値観と決別したからであると結論づけている。最終的には、戦争というものが全ての点で破壊的であることを踏まえ、アレックの運命も、その枠組みの中で捉える必要があると主張している。<sup>12</sup>

以上が Skei の見解の概要であるが、作品の構造を更に詳しく検討すると、アレック・グレイの行動についての違った側面が浮き上がってくる。アレックの悲劇はむしろ、家族や伝統的な価値観への強い思いゆえに展開しているものなのではないか。また、その悲劇とより深い関係があるのは、社会的階級の流動性もしくは固定化の問題よりもむしろ、家族の絆や

世代間の葛藤なのではないか。さらに、この作品においては、普通の人々の素朴な伝統的価値観が、むしろ皮肉にも戦争の悲劇の一端を担う結果となり得る点が示唆されているのではないか。少なくとも本作品には、これらの側面を浮き上がらせるような装置が組み込まれている。以下において、その装置の詳細を具体的に検討してゆく。

### Ⅲ

“Victory”を丹念に読むと、3つの座標軸が立ち上がってくる。この3本の柱を軸に、この作品の内部には、読み手をどのように誘導する装置が仕込まれているのかを、浮き上がらせてゆきたい。それぞれの柱のキーワードは、往復する時間、移動する視点、対になったエピソード、である。

最初に、「往復する時間」について説明する。上述のように、“Victory”という作品は時系列に沿って語られているのではなく、時間の流れをあるやり方で再構成しながら展開させるという方法がとられている。作品は7つのセクションからなり、それぞれが、ある時点と場所を中心に展開する。最初のセクションは、主人公が戦後、フランスを訪れる場面を扱っている。読者は冒頭で、じめじめとした天候の中(“damp morning”)パリのリヨン駅に降り立つ英国紳士風の人物に出会うことになる。この人物の名字がグレイであることが明らかになってくるのは、次のセクションの半ば程になってからである。ここで代名詞や“passenger”“traveler”などの名詞でのみ言及される主人公は、きちんとした服装の、身のこなしが少しぎこちない長身の男で、ステッキを肌身離さず、先のピンと尖った口ひげが印象的な人物である。(“a tall man, a little stiff, with a bronze face and spike-ended moustaches and almost white hair.”) 比較的短い次の第2セクションでは、先ほどのセクションとは突然様子が変わり、兵卒のアレックが閲兵を受ける場面が繰り広げられる。ここでの中心人物である兵卒は、最初“the soldier”と言及されるに留まっている。読者はこの兵卒が、髭を剃っていない為に将校



に名前を問われて“024186 Gray”と答える場面にさしかかった時点で初めて、グレイという名字を目にすることになる。この後、同セクション内で兵卒は“the man Gray”などと言及される。これにより読者は、続く第3セクションでグレイ家の様子が語られる際、この兵卒を容易にその家族の一員として認識することができる仕組みになっている。第2セクションはまた、第4セクションにおいてグレイが犯す、上官殺人の動機の説明を提供するという、重要な役割も担っている。

このようにして第1セクションから第2セクションへと時間を遡って物語が語られているのだが、次の第3セクションで更に時間軸を遡行し、読者は出征直前の主人公とその家族の様子を知らされることになる。ここで初めて口髭の紳士と若く頑固な兵卒が結びつき、その人物像にスコットランドの伝統的な船大工の長男という背景が与えられる。更に、長男と父親の間の確執や、父親と祖父との意見の相違などの微妙な人間関係が明らかにされ、これまで専ら外部から描かれていた主人公の内面に、読者が接近する足がかりが与えられる。しかし、読者は主人公の内面に踏み込む機会を長くは享受できない。語り手は、出征後の主人公に起こった事柄、すなわち、上官の刺殺や戦場での活躍、昇進などを、本人と故郷の家族との手紙のやりとりという形で示すのである。主人公のしたための手紙は短くそっけないもので、生きていくことができるという程度の情報しか含まれておらず、彼の心の内奥は字面からは伝わってこない。

上記の説明から分かるように、第3セクションは、時間軸を遡る折り返し地点となっている。このセクションの後半から、時間は現在に向かって逆流し始め、今度は時系列に沿って、主人公アレックの栄光から没落への道のりが徐々に読者に示されることになる。第4セクションで上官を銃剣で殺害し、戦功を表彰されて大尉にまで登りつめたアレックは、第5セクションにおいて病院の床の上で11月11日の休戦を迎え、退役後帰郷する。第6セクションでは、ロンドンに赴いて職を得るが、フランス訪問後に失業し、その後臨時の日雇いと転々と渡り歩いた挙げ句、橋のたもとで侘び

しい1日の終わりを迎える様子が語られる。最後の第7セクションにおいて、どん底に落ちたアレックが通りでマッチ売りをしている有様が、休戦の日に床を並べていた元戦友の視点を借りて、読者の前に晒される。このように、第3セクションの後半以降、過去から現在へと語り手が時間軸を移動する途上で、第1セクションおよび第2セクションで語られたエピソードが、みごとにそれぞれの位置へとハマってゆく。こうして読者は、アレックの歩んだ道を、軍隊生活と家族との関係との両面から立体的に把握できるよう誘導されるのである。

こうした作品構造によって語り手は、物語のプロットを読者に提供するという基本的な使命に加え、幾つかの副次的かつ重要な操作を、読者に対して行なうことができる。そのうちの一つは、出来事の因果関係を読者自身に結ばせるための手がかりを、物語全体を覆う雰囲気やモチーフとして効果的に行き渡らせるということである。“Victory”では、“damp”に類する言葉が各所に現れ、物語全体を湿った雰囲気と共に展開させている。また、スコットランド兵士やクライドサイドのグレイ一家が登場する場面で、独特の方言やアクセントを含む発話内容が視覚的に記述されるが、“A dinna shave, sir-r” “...I'll gang we ye and leave the auld folk like Matthew to do the best they can”など）時間軸の往復によって、このような場面が作品の各所に配置され、アレックの行動の背景としての伝統的なスコットランド気質を全編に行き渡らせている。このように、随所で語り手が使用する語彙がネットワークを形成して作品全体を包み込み、読者の注意をある方向に誘導しているのである。

アレックの転落の悲劇との関連において更に重要なのは、読者の意識にしっかりと刻印されるアレックの口髭である。アレックが口髭を蓄えるようになったのは、時系列に沿って整理した内容から推察すると、おそらく上官への昇進を決めたあたりからであろうと思われる。それ以降のエピソードを語る場面において、口髭の様子が描写されるからである。しかしながら、第一セクションは戦後の場面であるので、冒頭からアレックの口

髭が登場し、同じセクション内で繰り返し言及される。髭を剃らなかつたかどで処罰される第2セクションをはさみ、時間軸を逆戻りするにいたって再び口髭の記述が目立ち、最後のセクションでは、それがアレックの直面する窮状と皮肉なまでの対象を見せるようになる。こうして物語全体を通して、アレックの口髭は強く読者に印象づけられることになるのだが、語り手は更に、この印象にある方向性を与える操作を行なっている。アレックの口髭に繰り返し言及する際、それに冠する形容詞を次々に取り替えることにより、口髭がさまざまな事象と結びついて、ある種の象徴性を帯びてくるのである。先の尖った口髭は、アレックが上官を殺した銃剣の先と結びつくと同時に、上官から受けた屈辱の忘れ形見となり、更に、大人になりそなつた少年兵にとっての鎧として読者に迫ってくる。

口髭の象徴性を念頭におきつつ、上述した語りの構造を踏まえて、問題の核心であるアレックの転落と、彼が故郷に帰れない理由について、考察を進めてゆく。時間軸を再構成したセクションの配置に沿って検討すると、アレックの人生は、“...your bit ribbon...for that way lies vainglory and pride. The pride and vainglory of going for an officer. Never miscall your birth, Alec. You are not a gentleman. You are a Scottish shipwright...” (448) と手紙に書いてよこした父親の気持ちに反して、軍で出世する道を歩んだ時点を境に、転落への道を歩み始める。その発端には上官の刺殺事件があり、その起因となつたのは、閲兵で受けた処罰であると考えられる。では、アレックはなぜ、髭を剃っていないことを見とがめられて、素直に剃ることに応じなかつたのか。第2セクションの閲兵の場面においてアレックは、理由を問いつめられても“A am nae auld enough tae shave.” (439) という答えを繰り返すのみで、これ以外のことは一切口にしない。また、後になって伍長から理由を尋ねられ、“But ye kenned thae colonel would mar-rk ye on parade.”と言われた際も、“A am nae auld enough tae shave.”の一点張りである。前述のように、語り手はアレックの心に踏み込まないため、これ以上の説明はなされない。しかしながら、この直後に配置された第3セクションでのグレ

イ家の会話と照らし合わせると、その理由が浮かび上がってくるのである。

上述のように第3セクションは、出征を控えたアレックに対して父親と祖父が異なる反応を示す場面から始まる。父親は、戦争への参加をやめて家業をついでもらいたいという願いをこめて、アレックに以下のように話す。

“For two hundred years,” Matthew Gray said, “there’s never a day, except Sunday, has passed but there is a hull rising on Clyde or a hull going out of Clyde-mouth with a Gray-driven nail in it.” He looked at young Alec across his steel spectacles, his neck bowed. “And not excepting their godless Sabbath hammering and sawing either. Because if a full could be build in a day, Grays could build it,” he added with dour pride. “And now, when you are big enough to go down to the yards with your grandadder and me and take a man’s place among men, to be trusted manlike with hammer and saw yersel.” (441)

家業に誇りを持つ父親のセリフの、最後の文は特に重要である。アレックの“A am nae auld enough tae shave.”は、父親の“... when you are big enough to go down to the yards with your grandadder and me and take a man’s place among men, ...”と呼応する。アレックは本当のところは、伝統を重んじる一家の体質をそのまま受け継いだ純真な少年だったのではないか。家業を誇りとする父親と、女王への献身を肯定的にとらえる祖父の間で引き裂かれながらも、心の奥底では父親の意に沿いたいと思いつつ、重責を担う大人へと成長するまでの猶予期間として、出征したのではないか。アレックが故郷を離れてすぐに書き送った手紙の中で、おそらく淡々と“soldiering was different from building ships” (443) と報告している裏には、自分の決定に対する少なからぬ後悔の思いも混じっていたのではないかと考えられる。自分が大切にしたいと思っている伝統の重みに答えることができなかったのは、自分がまだ大人になっていないからだ、という論理が、父親の期待の

沿うことのできなかつた自分への唯一の言い訳であつたとすれば、将校の前で頑に繰り返した髭を剃らない理由も、全くの不可思議な反抗ではなくなってくる。したがって、懲罰を受け、髭を剃って元の小隊に復歸したアレックの運命の齒車は、この時点で既に狂いだしてゐたことになる。

アレックが、本当のところは伝統を重んじ、父親や祖父の意にそう人間になりたいと考えていたという見方は、先に触れた作品解釈の座標軸の、第2の柱に注目することによって裏付けられる。既に幾度か触れた通り、語り手は視点を移動させながら、物語を展開させている。しかし、肝心の登場人物は常に外部から描写され、読者がその心の襞に分け入ることを敢えて困難にしている。語り手と主人公との距離や、視点の所在は、語り手がどのような言葉で主人公に言及するかによって図ることができる。<sup>13</sup>これをセクション毎に観察してみると、語り手とアレックの位置は、冒頭から話が進むにつれて次第に縮まり、ある一点で最接近して、再び最後の場面にむけて遠ざかってゆくことがわかる。この、語り手とアレックの距離が最も近づく時点、すなわち、読者がアレックの心を覗き込む唯一の機会、第5セクションに見いだされる。ここで初めて語り手は、それまでの“he”“traveler”“soldier”“newcomer”“Gray”などとは異なり、主人公を“Alec”という言葉で指し示す。皮肉にもこの場面は、アレックが戦後ロンドン行きの決心を父親に打ち明けるところであるが、彼は“the proper uniform for a Gray is an overall and a hammer.”(454)という父親の言葉に素直にうなずき、もしロンドンでの仕事が失敗したら、帰郷して船大工になると話すのである。

しかし、これは実現することはなかつた。ロンドンで物乞いにまで身を落としたアレックは、石鹸で口髭を固め、街頭に立つ。アレックの口髭は、上官に上り詰めた元下級兵士の惨めなプライドであると見なされがちであるが、上述のように、この口髭は多様な象徴の意味を帯びている。それは、故郷に帰りたくとも帰れないアレックが、この先ずっと背負ってゆかねばならない十字架であると言えるかもしれない。なぜなら語り手によ

ればアレックは、“no man has courage but that any man may blunder blindly into valor as one stumbles into an open manhole in the street.” (454) と認識しているからである。戦場の混乱が背景にあるとはいえ、上官を残忍な手口で殺害し、戦功十字勲章を受けたアレックの人生の時間は、物語の変幻自在な語り手とは異なり、故郷を離れた少年の時点に引き戻すことはできないのである。

では、アレックがその進路を修正する余地は、彼の歩みのなかに存在しなかったのであろうか。先に、座標軸の第3の柱として挙げた、「対になったエピソード」に注目してみる。アレックの生き方と対置されているエピソードが、最後の2つのセクションに含まれている。一つは、偽装の恋人を見破る盲目の兵士の挿話、いま一つは、休戦日を共に病院のベッドの上で迎えたが、その後しなやかに転身をとげてカナダで事業を成功させた、元戦友の帰国のくだりである。前者は、物語の随所に現れる「偽」「裏切り」といった語彙のネットワークと呼応して、自分に最も必要な価値の真偽を見抜くことができなかつたアレックの未熟さを浮き彫りにする。また、後者は、冒頭から現れて全編に響いている「こわばり」「固さ」に類する語彙のネットワークと反応して、過去に執着しない人間が悠々と成功を手にする過程を示し、伝統のしがらみと常に共にあるアレックの悲劇を救いようのないものとして提示している。

#### IV

以上に述べたように、“Victory” という作品は、様々な語りの装置を用いて、精巧に組み立てられた作品である。フォークナーの短編制作の初期にその萌芽を見いだすことができるとすれば、この作品でフォークナーが用いた技巧が、後の最盛期の短編へと発展的に受け継がれたと見ることができよう。また、語りの構造を通して見てきたように、この作品が第一次世界大戦を重要な枠組みとしながらも、伝統に誇りをもつ家族の末裔が、自

己実現にもがく姿を提示していることを考えれば、この作品の人物設定は、後の傑作『響きと怒り』のコンプソン家と重なってくる。『響きと怒り』に続いて次々と世に出るヨクナパトーファ郡の物語が、南北戦争の傷を深く負い、人種差別の暗部を内包した土壌の上に展開していることを考え合わせれば、第一次世界大戦をテーマとする本作は、フォークナー自身が同時代を生きた歴史的経験として、南北戦争を描くための修練の場であったと位置づけることもできる。

最後に、“Victory”に現れる聖書への言及について触れておきたい。この作品において、重要な節目で聖書が印象的な役割を果たす。マシュー・グレイは、戦争に出る息子に聖書を持たせる。アレックは懲罰隊に送られた間に、タバコの火をつける目的で聖書のページを次々に破って使用するという有様であった。しかし、上官の殺害を決心するにあたってアレックは、聖書の中の、ある部分を参照する。上述のように、この事件が後のアレックの運命に大きな影を落とすことになる。また、マシュー・グレイは帰還した彼の行く末を案じて、聖書の言葉に頼ろうとする。開いた聖書を見て、結果的に彼は、ロンドンで働くという息子の生き方を容認することになる。前者で引用されている箇所は、新約聖書の使徒行伝10章の第13節“**And a voice came to him, ‘Rise, Peter; kill...’**”という部分である。ペテロがイタリア隊のコルネリオを招き入れる場面の直前である。また後者は、旧約聖書の年代記2の17章14節“**...and the captains of thousands and the captains of ten thousands...**”である。いずれも、その部分のみをとりあげると、それを参照した状況に立たされた者にとって強く響く言葉であるが、両者とも、その引用部分が埋め込まれている聖書の文脈から切り離された状態で利用されている。これらの場面は、アレックの悲惨な運命と結びつくべく配されているために、敬虔な信者の行動の規範がアイロニカルなかたちで悲劇へと向かう道筋が、極めて強く印象づけられる結果となる。

このようにしてフォークナーは、作家としての経歴の出発点においてすでに、戦争および宗教と人間の運命との関係についての多角的な側面を提

示する創作方法を模索していたことがわかる。この意味において、フォークナーの“Wasteland”は、彼に作品世界の豊穡な舞台を準備することとなったと言えるであろう。

## 注

- 1 *Faulkner in the University*. p.4. どのような時期に詩を書いたのかという質問に関連して、フォークナーは以下のように答えている。“...It may be—I’ve often thought that I wrote the novels because I found I couldn’t write the poetry, that maybe I wanted to be a poet, maybe I think of myself as a poet, and I failed at that, I couldn’t write poetry, so I did the next best thing.”
- 2 Jones 1994, p.xiv.
- 3 Gray 1996, p.309.
- 4 Skei 1981, p.38.
- 5 Skei 1999, p.194-95. “The Wasteland”に属する作品のうち、“Victory” “Crevasse” “All the Dead Pilot”は、*These 13*が初出である。“Ad Astra”は、短編集に収められる以前に雑誌掲載されていた。
- 6 Jones は *A Reader’s Guide to the Short Stories of William Faulkner* において、*Collected Stories* に所収の短編を、セクション配列に沿ってくまなく扱っているが<sup>3</sup>、“A Rose for Emily”や“Red Leaves”などの作品について十分に考察することとひきかえに、“The Wasteland”と“Beyond”に含まれる短編を取りあげることがを断念している。(xiv)
- 7 Skei 1999, p.195. “My own opinion of the story has changed gradually over the years, until I now am willing to include it among Faulkner’s dozen best works of short fiction.”
- 8 Skei 1999, p.195-96. 後者に属する批評が、第一次世界大戦との関係性が希薄でも、いずれも“Wasteland”という観点から世界を捉えているものであることは認めている。
- 9 William Faulkner. *The Collected Stories of William Faulkner*. Vintage Books: New York, 1977. p. 442. 以下、本文からの引用はすべてこの版により、引用ページ数は括弧内に示す。
- 10 吐き気を催すというモチーフは、第一次大戦を扱う他作品の中にも見られる。
- 11 Skei 1999, p.204. “Alec Gray is caught in the spider web of urban life, based on false



pretensions. When he has begun this new life his pride prevents him from changing its course, even when he becomes a beggar on the streets. ”

- 12 Skei 1999, p.205. “...he has had other options and is completely lost because he has settled for new values of little worth to replace the lasting, traditional, and life-giving norms of family and home....Alec Gray’s story proves that not only...people of more or less aristocratic birth are lost and condemned; also the humble people who during a war rise to a pseudo-aristocracy (the officer class) will ultimately fall. The tragic results of Alec’s break with his family and the traditional values it represents may also indicate that the plain people’s values are normative: they set a standard against which other characters’ actions and ideals may be measured.”
- 13 第一セクションにおける外部の視点については、Skei が詳しく分析を行なっている。(Skei 1999, p.194-205)

## Works Cited

- Brown, Calvin S. *A Glossary of Faulkner’s South*. New Haven: Yale University Press, 1976.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: a Biography*. Jackson: Mississippi UP, 2005.
- Cowley, Malcolm. *The Faulkner-Cowley File: Letters and Memories, 1944-1962*. New York: The Viking Press, 1966.
- Faulkner, William. *The Collected Stories of William Faulkner*. Vintage Books: New York, 1977.
- Gray, Richard. *The Life of William Faulkner*. Cambridge: Blackwell, 1996.
- Gwynn, Frederick L., Joseph Blotner eds. *Faulkner in the University*. Charlottesville: Virginia UP, 1995.
- Harrington, Evans, Ann J. Abadie eds. *Faulkner and the Short Story: Faulkner and Yoknapatawpha, 1990*. Jackson: Mississippi, 1992.
- Jones, Diane Brown. *A Reader’s Guide to the Short Stories of William Faulkner*. G.K.Hall &Co: New York, 1994.
- Ross, Stephen M., and Noel Polk, eds. *Reading Faulkner: The Sound and the Fury*. Jackson: University Press of Mississippi, 1996.
- Skei, Hans H. *Faulkner: The Short Story Career*. Universitetsforlaget: Oslo, 1981.
- Skei, Hans H. *Reading Faulkner’s Best Short Stories*. South Carolina UP: Columbia, 1999.